

經濟論叢

第 161 卷 第 3 号

第二次世界大戦期の国際決済銀行(2)……………西 牟 田 祐 二 1

經濟發展過程における生産性成長と

要素投入成長の役割……………松 尾 昌 宏 22

香港上海銀行と中国政治借款の展開(1)……………蕭 文 嫻 45

「新装花王石鹼」のブランド戦略(2)……………齊 木 乃 里 子 62

組織帰属意識の国際比較研究の

問題点とその課題(1)……………太 源 有 79

学 会 記 事

平成10年 3 月

京 都 大 学 經 済 學 會

第二次世界大戦期の国際決済銀行（2）

——大戦中の BIS 経営陣——

西 牟 田 祐 二

I 第二次世界大戦直前期の変化

戦争勃発前の最後の数ヶ月において国際決済銀行（BIS）にいくつかの変化が起きた。1939年2月と3月にバーゼルにおける二人の主役たちが相前後して退任したのである。ドイツ・ライヒスバンク総裁のヤルマール・シャハトが BIS 監査役会を去り、また経営統括権を持つ BIS 総裁のオランダ人ヴィルヘルム・バイヤンが12月の終わりに離任する事を明らかにしたのである。

シャハトのバーゼルからの退任は彼のライヒスバンク総裁からの解任の結果であった。その直接的なきっかけは彼のヒトラーに対する1939年1月7日の手紙が与えた。その中で彼は他の7人のライヒスバンクの幹部とともにヒトラーにたいし第三帝国の軍備拡大をこれまでのようなライヒスバンクの信用によってではなく将来は税金によって賄うように懇願したのである。それへの回答としてヒトラーは彼の長い間の忠実な従者であったシャハトと7人の他の署名者の内の6人をライヒスバンクから解任した¹⁾。ただひとり外国為替のスペシャリストであるエミール・プール Emil Puhl は、ライヒスバンクに据え置かれた。後述するようにプールは戦争中ベルリンとバーゼルとの間を結合するコンタクト・マンとしての役割を担うのである。来るべき戦争には「財政の魔術師」シャハトはライヒスバンクの頂点には必要なかった。加えてシャハトは1930年代中頃より激しく戦って来たヘルマン・ゲーリングとの権力闘争にも敗

1) Vocke, Wilhelm, *Stabiles Geld*, Frankfurt 1957.

れていた。だがライヒスバンク総裁の解任後シャハトはヒトラーからまったく冷遇されたのではない。彼の国際金融界とのコンタクトは重要であった。シャハトは無任所大臣として政府に残ったのである。

新しいライヒスバンク総裁としてヒトラーはライヒ経済相のヴァルター・フンクを据えた。ドイツの化学トラストのIGファルベン社長のヘルマン・シュミッツ Hermann Schmitz とこれまでどおりのクルト・フォン・シュレーダーとともにフンクがいまや戦争終結までのドイツからのBIS監査役会へのトリオとなった。ライヒスバンク副総裁エミール・プールがヴァルター・フンクの代理者として彼らを補完していた。これらの代表団がBIS監査役会の3月例会のために全部そろってバーゼルで落ち合った時、ヒトラーにとってBISがさらに一層重要であるという事がはっきりしてきた。ヘンリー・モーゲンソーが偵察者としてバーゼルに派遣していたマー・カクラン Merl Cochran の電報の中で当時第三帝国からBISへの新たな人員の就任は次のように出てくる。「ヴァルター・フンクは諸中央銀行総裁に対して、ライヒスバンクのBISにたいする関係は何も変わりませんと言ひ、BISに友人のシャハトに対してと同様の協力を請うた。彼は総裁たちに彼自身あらゆる協力の用意がある事を保証した。すべてにおいてフンクはBISに対しての積極的な姿勢によって私にも好印象を与えた。またライヒスバンク副総裁エミール・プールも私に対して積極的な印象を与えた。」²⁾ 諸中央銀行総裁たちの、新たなライヒスバンク法がこのドイツの中央銀行を法的にフューラーの下に置くとしていることについてのある種の懸念をプールは次の言葉で取り払った。「新たな定款でライヒスバンク経営組織に導入された指導者原理は、決定が経営陣の多数決によって行なわれるのではなく、一に総裁によって行なわれることを意味しています。シャハトのもとではライヒスバンクは形式的には民主主義的でしたが、しかし事実上われわれ幹部は何も言うべきものを持ちませんでした。つまり、ライヒスバ

2) Franklin D. Roosevelt Library, Hyde Park N.Y., Morgenthau Diaries, 14. 3. 1939, Telegram von Cochran an Morgenthau.

ンクは“全体主義的”だったのです。いまや新しい総裁、フンクのもとで確かに定款には指導者原理が掲げられましたが、事実上はわれわれは協力し合っています。今日ではライヒスバンクはシャハトの下でよりも民主的です。』³⁾

スイスとの関係

ヤルマール・シャハトとヴィルヘルム・バイヤンの辞任の影でこの年の初夏にはまた BIS のスイス国立銀行との関係が少しぎくしゃくした。スイス国立銀行総裁エルンスト・ヴェーバー Ernst Weber, 副総裁のパウル・ロジー Paul Rosy および総支配人のフリッツ・シュノルフ Fritz Schnorf は BIS の監査役会におけるスイスの議席を放棄しようと考えたのである⁴⁾。その理由は、イングランド銀行のオットー・ニーメイヤー卿 Sir Otto Niemeyer がスイス国立銀行副総裁パウル・ロジーの BIS 監査役会入りに対して拒否権を発動したからである。サー・オットーはイングランド銀行のノーマン総裁の右腕であり、BIS 監査役会の議長であった。彼はスイス国立銀行の経営陣に、かれらの総裁のエルンスト・ヴェーバーの代わりに副総裁のパウル・ロジーによって BIS 監査役会でスイス国立銀行を代表させる事は容認できないと主張したのである⁵⁾。ニーメイヤーのエルンスト・ヴェーバーとの話し合いにおいても意見の一致はもたらされなかった。サー・オットーはパウル・ロジーをはっきりと拒否し、他方スイス国立銀行の側では BIS 監査役会への代表者の人選を決して外部から指図されようとはさせなかった。ロジーは抗議している。「監査役会議長のオットー・ニーメイヤー卿の候補者わたくしに対する拒否権はまったく理解できない。彼自身何らかの中央銀行の総裁でもないし副総裁でもない。またかれは、同様にライヒスバンクの総裁でもないエミール・プールの BIS

3) McKittrick Collection; 10. 7. 1939; Notes on conversation with Herr Puhl in Basel from Per Jacobsson.

4) Schweizerische Nationalbank, Direktoriumsprotokoll, 1. Halbjahr 1939, S. 523f, in G. Trepp, a. a. O.

5) Schweizerische Nationalbank, Protokoll des Bankausschusses, 1. Juni. 1939, in G. Trepp, a. a. O.

監査役会メンバーへの任命に何ら異議を唱えなかった。BIS の内部において小国が陥らねばならない不平等な扱いがあるなら、わたしが BIS のサークルで協力することはできない。』⁶⁾

スイス国立銀行代表の BIS 監査役会からの退場という事態はスイスの金融部門の長であり、連邦評議員のエルンスト・ヴェーバーには同意できないことであった。かれはスイスの利益（国益）にはこの機関との個人的な（人格的な）コンタクトがぜひ必要だと考え、従ってスイス国立銀行経営陣にニーメヤーの条件に従うことを要求した。それに対して経営陣はスイス国立銀行の上位の経営機関である銀行委員会においてこの問題を提起した。銀行委員会が連邦評議會の見解を多数で支持した後、エルンスト・ヴェーバーはついに自らの意志には反して彼自身が BIS の監査役会議席に残ることになった⁷⁾。

オットー・ニーメヤー卿によって命じられたスイス人エルンスト・ヴェーバーの選任という事態は BIS の監査役会における実際の権力配分について光を当てるものである。監査役会には3つの階層がある。完全な議決権、すなわち拒否権、を持つものはただ6つの構成員すなわちイギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、イタリア及び日本の中央銀行総裁である。第二の階層は、オランダ、スウェーデン、スイスの3つの中央銀行幹部である。第三の階層は、6つの中央銀行総裁から指名される8つの監査役会メンバー。通常はそれぞれの総裁の副官である。ドイツとフランスはさらに民間銀行界から第三の代表者を出せる。ヨーロッパの諸大国の中央銀行家たちの高貴なクラブにおいてはスイス国立銀行の代表者はただ控えめな副次的な役割を演じていたに過ぎない。BIS にたいするスイスの固有の貢献は機能する金融場所を用意したこととスイス・フランという安定的な通貨にあるのだ。そして1936年9月28日のスイス・フラン切り下げを度外視すれば BIS はこの点で満足していたのである。

6) Schweizerische Nationalbank, Direktoriumsprotokoll, 1. Halbjahr 1939, S. 524, in G. Trepp, a. a. O.

7) Schweizerische Nationalbank, Protokoll des Bankratsausschusses, 1. Juni 1939, in G. Trepp, a. a. O.

スイス・フラン切り下げの問題を BIS 銀行部門は引き続き旧来の金に対するスイス・フラン交換比率を維持することで解決した。1850年以来変化していない純金 0.29032258 グラム = 1 スイス・フランの比率が 30% だけ切り下げられた時、BIS はこれに参加しなかった。同行はスイスフランの旧金交換比率を維持し、それ以来 BIS に固有の通貨を「スイス金フラン」という名前で帳簿記載し、その金交換比率は切り下げ前の比率に維持された⁸⁾。

アメリカ合衆国人の BIS 総裁選出

1939年3月イギリス＝オランダ系企業ユニ・リーヴァ社がオランダ人の BIS 総裁ヴィルヘルム・バイヤンを同社のロンドンでの総支配人として任命することになった。バイヤンの後継者さがしは困難で大胆な企てであった。というのはこうしたポストに対する適切な候補者は非常にまばらにしかいないからである。新しい BIS 総裁は、特別の専門的及び人格的要求のほかに、イングランド銀行、フランス銀行、ドイツ・ライヒスバンク、イタリア銀行およびベルギー国立銀行の愛顧を受けなくてはならないばかりではなく、より小さな諸中央銀行にとっても都合がよくなくてはならないからである。最初の候補者選びの巡回は、一人のスウェーデン人、一人のスイス人、一人のオランダ人から成っていたが、誰も愛顧を獲得できなかった。そこで結局オットー・ニーメイヤー卿はロンドンのシティに豊富な鉱脈を見つけた。1939年6月戦争前の最後の会議で BIS 監査役会はアメリカ合衆国人のトーマス・ハリントン・マッキトリック Thomas Harrington McKittrick を1940年1月1日付けで3年任期の新たな BIS 総裁に選出した。アメリカ合衆国連邦準備制度はこの選出に対し何も反応はしなかった。

アメリカの諸新聞はマッキトリックの選出を積極的に受け止めていた。当時

8) Die Bank für Internationalen Zahlungsausgleich und die Basler Zusammenkünfte, Hrsg. BIZ, Basel 1980, S. 46. 本稿の中ではスイスフラン名で表示された金額は必要な場合にのみ BIS の使用した通貨「スイス金フラン」から通常のスイスフランに計算し直す。

ウォール・ストリート・ジャーナルは次のようにコメントしている。「アメリカ人の任命をもってこの国際銀行はヨーロッパ政策の銀行サークルから移されるべきだろう。この任命で BIS の管理の政治的中立性は確保されたと見なされ得る。そしてマッキトリックの20年間のヨーロッパでの経験はこの難しい時代において BIS の中立性だけではなく、その効率的経営も期待させるものである。(中略) BIS 監査役会はこのアメリカ人を少なからず次のような期待を持って選出したものと思われる。すなわちチェコスロバキアの金の一件によって打撃を受けた同行の評価を再び改善するということがそれである。』⁹⁾

トーマス・H・マッキトリックはミズリー州セント・ルイスの中産階級の出身で、この年50歳になったところであった¹⁰⁾。1907年から1911年までハーヴァード大学で学んだ後セント・ルイス大学で法律学を専攻した。1916年にマッキトリックはニューヨークのナショナル・シティ・バンクのジェノア支店の副支店長になった。1918年はじめから1919年の終わりまでかれはフランスにおけるアメリカ合衆国軍に2年間勤務した。1920年のはじめにマッキトリックはニューヨークに戻り、そこでリー・ヒギンソン銀行商会 Lee Higginson & Co. のジュニア・パートナーとなった。1922年かれはロンドンのヒギンソン銀行商会に移り、そこで1939年6月に次期 BIS 総裁に選ばれるまでの15年間を過ごした。年月の経過の中で彼は様々な役職につき、ロンドンにおけるアメリカ合衆国商業会議所会頭やバーゼルにおけるドイツ商業債務の据え置き協定のための仲裁委員会副議長等に就き、またエストニアのレヴァル(タリン)にあるノルディッシュ製紙会社の社長ともなっていた。「当時30歳代にロンドンでわたくしはまるでイギリス人のような生活を送っており、ほとんどもはやアメリカ人ではないかのようなだった。」とマッキトリックは、1964年にプリンストン大学のジョン・フォスター・ダレス・オーラルヒストリー・プロジェクトの

9) *The Wall Street Journal*, New York, 16. 6. 1939.

10) マッキトリックの経歴については次を参照。Interview with Th. H. McKittrick, The John Foster Dulles Oral History Project, C. Mudd Manuscript Collection, Princeton University, Princeton, N. J., 1964 (Micro Film Edition).

歴史家がすでに年金生活に入っている彼をたずねた際に回想している。「少なくとも月に一回はわたしは大陸ヨーロッパに渡り、ヨーロッパの金融界ではほとんどイギリス人として通っていた。1922年以来ロンドンで働き、生活し、さらにそれを超えて明瞭なイギリスの金融機関を代表していた。ニューヨークの個人銀行とのあらゆる結合関係にもかかわらず、ヒギンソン銀行商会における私のパートナーはみなイギリス人であった。」¹¹⁾ 1939年3月にヒギンソン銀行商会のふたりのイギリス人の上級パートナーが退職した後で、ニューヨークのリー・ヒギンソン銀行商会はロンドンの子会社を解消することに決めた。マッキトリックには職がなくなり、BISからの申し出の仕事はまさに渡りに船だったと彼は言う¹²⁾。これをもってBISはレオン・フレーザーの退任の4年後になってふたたびアメリカ人の総裁をもつことになったのである。そしてしかもBIS敵対者でアメリカ合衆国財務省長官のヘンリー・モーゲンソーのひいきの人間ではなく、BISに友好的なウォール・ストリートの民間金融界の信頼できる人間に他ならなかった。

BISにとってもトーマス・H・マッキトリックの人選は幸運であることが分かった。第二次世界大戦中にバーゼルに運ばれたこのミズーリ出身の男は、確かに、なぜBISが戦時期を超えて生き抜いたかの唯一の理由ではないだろう。しかし、BISが、アメリカ人の総裁なしでは戦争を損失を被らずに生き延びることはできなかったであろうことも同じく確かなことである。このことは行論のうちに明らかとなる。

II 戦時への適応過程

対独宥和政策から1939年9月における英仏のドイツに対する経済戦争への移行は、まったく突然に起きたのではなく一步一步経過した。たとえば1939年から40年にかけての冬の時期の連合国の大陸ヨーロッパへの海上封鎖はイタリア

11) Oral-History-Interview McKittrick, p. 7.

12) Oral-History-Interview McKittrick, p. 9.

に対する寛容な適用の結果として穴だらけであった¹³⁾。全面的な経済戦争は1940年5月10日ドイツのベルギー及びオランダへの攻撃を契機としてはじめて始まったのである。その後も例えば当時のイギリス外相でそののちイギリスの駐米大使となったハリファックス卿 Lord Halifax のような極端な適応主義者はドイツとの勢力均衡という選択肢を保持し続けた¹⁴⁾。かれらはそのことによって大英帝国の維持を期待したのであった¹⁵⁾。

大戦勃発後の最初の日々においてイングランド銀行総裁モンタギュー・ノーマンは予定された BIS 総裁であるマッキトリックにたいして、「イングランド銀行はどんな場合でもバーゼルの BIS の機構を維持することを望んでいる。たとえ枠組だけであったとしても。」と強調していた。「というのはもし再びよい時代が来るのであれば、われわれはそれを放棄することはできないからである。」¹⁶⁾ BIS を維持するという信条はただ実行に移すには大変難しいことだということをノーマンは正確に知っていた。「もしわたしが今日バーゼルでドイツの BIS 監査役会メンバーと同じテーブルに座れば、わたしは対敵取引禁止法に違反することになるだろう。敵との経済的なコンタクトを厳格に禁じているあのイギリスの法律である。」¹⁷⁾ ロンドンでの動きとは違って、パリではむしろ BIS の解散への方向の動きの兆候が出始めていた。フランス政府はかれらの BIS にたいする8000万スイスフランの利子なし保証払い込み金の解約予告をし、他方で BIS のフランス人総支配人のロジェ・オブワン Roger Auboin は、彼自身とドイツ人総支配人のパウル・ヘヒラー Paul Hechler は戦争の継続の間 BIS 経営陣から抜けるべきだという提案を同時に行なっていた¹⁸⁾。こうした、一定の国籍比率に従ったつくられていた BIS の経営ポストからフラ

13) Tonndorf, H. G., *Krieg der Fabriken*, Zürich, 1943, S. 110.

14) Costello, John, *The Ten Days that Saved the World*, 1991.

15) Roberts, Andrew, *The Holy Fox, A Biography of Lord Halifax*, London, 1991.

16) McKittrick Collection, Brief von Sir Otto Niemeyer an McKittrick, 14. 9. 1939.

17) McKittrick Collection, Memo von McKittrick an US-Botschafter Leland Harrison, 17. 12. 1941.

18) Schweizerische Nationalbank, Direktoriensprotokoll 2. Halbjahr 1939, S. 1078, in Trepp.

ンス銀行やライヒスバンクが抜けるということは、その他の諸中央銀行の BIS にたいする信頼性を疑いもなく壊すものであって、これをもって BIS の終焉を確認することになったことであろう。これを阻止するためにイングランド銀行は1939年の9月半ばにotto・ニーメイヤー卿にイギリス政府の全権を持たせてパリに派遣した。そして当時支配的であった対独宥和から経済戦争への流動的な移行という雰囲気のもとでニーメイヤーとフランス銀行首脳は英仏両国の蔵相との合意の下で「BIS の戦時への適応」という概念を展開した。すなわち BIS の月例の監査役会会議の中断と経営責任の新たな総裁、当時はまだ中立国であったアメリカ合衆国から来た新たな BIS 総裁への委譲による BIS の中立化である。

さらにそれを超えてパリではまた戦時における BIS にとっての4つの中立原則が作成された。ロジェ・オブワンは戦後になってからこれを次のように書いている。

「I：バーゼルにおける諸発券銀行総裁による月例の BIS 監査役会会議と年毎の株主総会は戦争の間一時中断され、その間 BIS は経営陣によって監査役会メンバー相互の書簡を通じた相談・決定が導入される。

II：BIS はすべての文書交換諸銀行にたいしいずれの側からであれ異議を唱えられる業務を決して行なわない、しかもそれが純粋に合法的のものであってもそれを行わない、ことを保証する。III：BIS は政治的領土的な新秩序をすべての側がこれを受け入れた時初めて承認する。IV：すべての BIS の個々の業務はこの自ら課した厳格な中立性という行動原理を満たさなければならない。』¹⁹⁾

イギリスとフランスによる BIS の存続という原則決定は金融的にも経済政策的にも動機づけられたものであった。純粋に金融的に見るとフランスとイギリスは BIS から最も多くの利益を得ていたのである。フランスの BIS への貸

19) Auboin, Roger, "The Bank for International Settlements 1930-45," in *Essays in International Finance*, Princeton, N. J., 1955.

し付け金は2億3千2百万スイスフランに達しており、イギリスの場合は8千万スイスフランであった。このヤング案にもとづく貸与金は大部分がドイツに投資されていたのである。他方ライヒスバンクはBISのドイツに対する投資の利子を毎年きちんと支払い続けていた。ロジェ・オブワンが強調するところではこうである。「両債権国の共通の利益は、この機関が正しく運営されるという前提の下で、ドイツ・ライヒからの利子の移転メカニズムを機能し続けさせるということにあった。」²⁰⁾

金融的利益と並んでイングランド銀行とフランス銀行はBISの存続にひとつの経済政策的な利益を見ていた。両行は、戦争終結後においても「ヨーロッパの諸中央銀行間協力および国際的な経済記帳のための技術的な手段という職務を放棄してはならない」と考えていたのである²¹⁾。

3人のドイツのBIS監査役会メンバーたちすなわちライヒスバンク総裁ヴァルター・フンク、ドイツの民間銀行の代表者のクルト・フォン・シュレーダー男爵、およびドイツの産業界を代表するIGファルベン社長のヘルマン・シュミッツは上述のバリでの会議には出席していなかった。ドイツ人たちはしかしながらこの敵によって見出されたBISの存続のための解決策に完全に同意した。ライヒスバンク副総裁のエミール・ブールは1939年11月にフォン・シュレーダー男爵にたいしこう伝えている。「ライヒスバンクはBISのさらなる、無傷の業務活動に利益がある。BIS監査役会の公式の会議開催が時機を得たものでないのであるから、諸監査役会メンバーはBISとのつながりを人格的に（個人的に）保ち続ける必要がある。またBISの経営陣は個々の構成員に重要な問題について常に事情を知らせておくことになるだろう。」²²⁾

イタリア銀行もBISの存続に大きな関心があり、総裁のヴィンセンツォ・アゾリーニ Azzolini Vincenzo は1939年11月にこのことをイングランド銀行に

20) McKittrick Collection, Roger Auboin, Note sur la BRI pendant la guerre vom 10. 10. 1944.

21) McKittrick Collection, Roger Auboin, Note sur la BRI pendant la guerre vom 10. 10. 1944.

22) Brief von E. Puhl an K. von Schroeder, National Archives of the United States, RG260, OMGUS, 11/402/2, 940. 61, Gold, Bank for International Settlements.

もライヒスバンクにも手紙で知らせている。アゾリーニへの返事でライヒスバンク総裁は再度、いまや相互に敵対している BIS 構成諸国の共通の利益を、戦後のヨーロッパの再建の際に BIS のような有用な金融機関を直ちに使えることが最も有益であるという議論でもって強調している。そして彼は付け加えた。「あなたも私に同意すると確信するが、新聞には BIS の客観的な仕事の利益のためには全関連諸問題を議論するための機会をあまり与えない方がよい。」²³⁾ オランダ、スウェーデン及びスイスの中央銀行総裁たちは彼らの見解を問い合わせられることもなく、ただ大勢の結論を知らされただけであった。

経営陣の引継ぎ

1939年9月における監査役会月例会議の中断をもって BIS の経営責任は事実上経営陣に移った。この機関は当時ヴィルヘルム・バイヤン総裁と二人の総支配人ロジェ・オブワン Roger Auboin およびパウル・ヘヒラー Paul Hechler によって構成されていたが、そのヴィルヘルム・バイヤンは1940年1月をもってトーマス・H・マッキトリックと交代した。広義の経営陣には通常総合秘書のラファエル・ピロッティ Raffaele Pilotti、銀行部門責任者のマーセル・ヴァン・ジールランド Marcel van Zeeland、それにスウェーデン人の主任エコノミストのペル・ヤコブソン Per Jacobsson が加えられる(拙稿(1)、『経済論叢』第161巻第2号、3頁表1参照)。それではここで BIS のこれらの(マッキトリック以外の)5人の幹部たちの来歴をざっと見てみよう。

フランス人の総支配人(Generaldirektor)のロジェ・オブワンはフランス銀行から1938年はじめに BIS の総支配人としてバーゼルに任命された。かれはフランス銀行理事会の構成員であり、中央銀行間協力のスペシャリストとして通用していた。バーゼルで20年間、しかもフランスにおける2回の体制転換の経過も乗り越えて、オブワンは1958年に年金生活に入っている。

23) McKittrick Collection, Brief von Reichsbankpraesident Walter Funk an Vincenzo Azzolini, Rom, 20. 12. 1939.

ドイツ人総支配人のパウル・ヘヒラーは、1940年7月1日にナチ党に加入(党員番号7685661)しているが、バーゼルでの BIS 総支配人かつ銀行部門責任者としての勤務は1935年5月1日より始めている。それ以前はライヒスバンク理事の一人としてベルリンに勤務し、そこで主導的な外国為替専門家として見なされていた。彼のバーゼルへの赴任の際にはベルリン証券新聞 *Berliner Börsenzeitung* もまた BIS にたいする好意的な言葉を書いている。「たいていの他の国際的な組織と異なって BIS においてはドイツの同様の地位が最初から疑念を持たれることもなく、決して脅かされようともしていない。」²⁴⁾ パウル・ヘヒラーは戦争中ライヒスバンクのバーゼルにおけるキー・パーソンであった。かれは BIS の等位の総支配人としての職にナチ・ドイツの崩壊を8ヶ月越えて1945年12月におけるかれの心臓発作による死まで就き続けている。

イタリア人の人事及び管理部門担当の総合秘書 (Generalsekretär) のラファエル・ピロッチは1930年からずっと BIS に勤務している。イタリア銀行が彼をバーゼルに派遣する以前は、かれはイタリアのドーズ案委員会派遣団の専門家の一人であって、その後はイタリア貿易省のトップ官僚であった。ピロッチはイタリア・ファシスト党の党員であった²⁵⁾。1943年から44年にかけてドウチェ (ムッソリーニ) の沈みつつある船からの成功裡の脱出のあと、かれは戦後1951年に年金生活に入るまで BIS においてイタリア銀行を代表し続けることになる。

ベルギー人のマーセル・ヴァン・ジーランド男爵は BIS 銀行部門 (Bankabteilung) の責任者のポストに就いていた。ナショナル・シティ・バンク・オブ・ニューヨークのブリュッセル支店副支店長だったかれは1932年から BIS に勤務する。戦争中ヴァン・ジーランドは、ベルギーの最高金融界の、ロンドンに亡命した小部分とブリュッセルにとどまってドイツ占領者と協力し

24) *Berliner Börsen-Zeitung*, 8. 4. 1935.

25) National Archives of the United States, RG84, Foreign Service Posts, 462.00R296 BIS/II-1444, Brief von US-Generalkonsul Walter K. Sholes, Basel.

たより大きな部分とが交差する点としての役割を果たした。30年間にわたる勤務の後マーセル・ヴァン・ジーランドは戦争中から継続している BIS 幹部の最後の人間として1962年に年金生活に入った。

BIS 主任エコノミストとして、伝統的におなじく BIS 経営陣に含まれているペル・ヤコブソンは、1931年9月以降バーゼルに在る。彼はスウェーデン人であるがスウェーデン中央銀行に属しているのではなく、自由な労働市場からリクルートされた人間であった。ヤコブソンに率いられた BIS の通貨及び経済部門は、全世界の中央銀行からバーゼルに流れ込む国際的な銀行世界の統計数字及び情報を選別し整理していた。ペル・ヤコブソンが責任ある著者として発行した BIS 年次報告は1930年代において頻繁に引用された国際的銀行・金融統計のひとつをなす²⁶⁾。1939年から1945年の間ヤコブソンはこの年次報告を戦争経済の包括的概説にまで拡張した。ペル・ヤコブソンは、26年間 BIS 主任エコノミストとしてとどまり、1957年に IMF 理事となってワシントンに赴任することになる。

イングランド銀行は1932年以来 BIS 経営陣には代表を送ってはいなかったが、会計主任の S.E. グッドウィンと会計副主任の G.J.A. ロジャーズによって BIS 会計部門における最重要のポストを得ていた。イングランド銀行からバーゼルに派遣されたそのほかの重要な幹部は総務の部門長である F.A. コロナットと副主任エコノミストの F.G. コノリーであった。

経営陣の場合と同じく、BIS のミドルの幹部ポストもある固定的な国籍比率が適用された。主導的なポストはそれぞれの諸中央銀行から直接代表として派遣された銀行職員たちによって占められた。幹部以外の職員に関しては当該部門に権限のある中央銀行がその任用に関して拒否権を持っていた。1939年9月においてはイギリス人14人、フランス人13人、ドイツ人11人、イタリア人8人、ベルギー人3人、アメリカ人2人、および日本人、スウェーデン人、チェ

26) Jacobsson, Erin E., *A Life for Sound Money, Per Jacobson, his Biography*, Oxford, 1979, p. 121.

コ人それぞれ一人ずつ、それに国籍を喪失したかつてのオーストリア人一人によって BIS の幹部職員は構成されていた²⁷⁾。この55人になお同じぐらいの数のスイス人の一般事務職が加わった。全体として BIS 職員総数は1939年から1945年の間に100人から110人の間を上下した。諸国籍に応じて分類された幹部と職員のさまざまな部門への配分は1930年以来大きくは変わっていない。ラファエル・ピロッティの下にある総務部 (Generalsekretariat) はイタリア銀行の支配領域であった。イギリス人とフランス人はそれぞれとりわけ会計分野と通貨・経済部門で働き、他方銀行部門は伝統的にドイツ・ライヒスバンクの領域であった²⁸⁾。

BIS における13人のフランス人の中にはロジェ・オブワンのほかに銀行部門第3課長の G. E. ロヨット G. A. Royot, エコノミストの M. ローデンバッハ M. Rodenbach が直接フランス銀行から代表として派遣されていた。残りのフランス人は下位の地位にあった。8人のイタリア人の割り当て人は総務部長のラファエル・ピロッティのほかにその代理のウラジミロ・ロンカグリ Wladimiro Roncagli および通貨・経済部門エコノミストの G. ザントボンテ G. Santoomte がイタリア銀行から代表派遣されていた。この部門には1939年の春から1940年の夏までアメリカ合衆国人のチャールズ・P. キンドルバーガーもまた働いていた。かれは、ニューヨーク連邦準備銀行からレオン・フレザーの推薦でバーゼルに研究目的で派遣されていたのであった。フランスの崩壊の後1940年の夏にキンドルバーガーは合衆国に帰国している²⁹⁾。

27) McKittrick Collection, Momo Raffaele Piloti for McKittrick BIS-Staff by Nationalities, 11. 09. 1942.

28) Zentrales Staatsarchiv Potsdam, Bestand: Dt. Reichsbank, Nr. 6741 Bl. 168, Postenbesetzung bei der Bank fuer Internationalen Zahlungsausgleich (Stand vom Juli 1939).

Schweizerisches Bundesarchiv, Sig. 2001(D)2. Band 198, Brief der BIZ an das Eidgenössische Politische Departement vom 10. 9. 1941 ueber die Autos der BIZ-Kaderleute.

—McKittrick Collection, Aufstellung ueber das deutsche Personal der BIZ fuer Dr. Schibli, Chef der Basler Politischen Polizei vom 21. 6. 1945.

29) C. P. キンドルバーガー, 『大不況下の世界 1929-1939』(邦訳石崎/木村訳, 東京大学出版会, iv ページ)。

11人のドイツ人 BIS 人員のなかにはパウル・ヘヒラーのほかにはさらに5人がライヒスバンクからバーゼルに派遣された幹部であった。数年間バーゼルに滞在してもかれらはなおベルリンで年金取得資格を保持したライヒスバンク職員としても通用していた。バーゼルに来ていた6人のライヒスバンク職員の内の4人がナチ黨員であった。パウル・ヘヒラーのほかには外国為替責任者の Dr. コンラート・ティールシュ Konrad Thiersch (1938年2月1日入党, 党員番号5506044), 会計部門のナンバー3であるルードヴィッヒ・メーラー Ludwig Maehler (1939年3月1日入党, 党員番号7024839), および銀行部門の南ヨーロッパ課の Dr. ギュントナー・ガルテンシュレーガー Gunther Gartenschlaeger (1933年5月1日入党, 党員番号3510811) であった。ドイツ国籍の残りの5人の BIS 職員は特別の機能を持たず翻訳・通訳者, 秘書, 銀行一般職員として働いていた。

III BIS 総裁マッキトリックの職務開始

ヨーロッパにおける戦争の勃発はアメリカ合衆国にいた予定された BIS 総裁であるマッキトリックを驚かせた。かれはちょうど BIS 総裁への就任の挨拶のためにニューヨーク連邦準備銀行総裁ジョージ・ハリソンやニューヨーク・チェース・バンクのウィンスロップ・オールドリッチ Winthrop Aldrich その他のアメリカの銀行家たちに表敬訪問をしていた最中であつた。既に述べたようにマッキトリックはその銀行家としての経歴を1922年以来ロンドンで行っており、前々 BIS 総裁で現ファースト・ナショナル・バンク副頭取のレオン・フレーザーを除いてアメリカの銀行シーンの主要な代表者たちをわずかに直接知っているだけであつた。フレーザーは1933年にマッキトリックをドイツ対外債務仲裁委員会の副議長に任命していた。広範なウォール・ストリートへの表敬訪問によってマッキトリックはこの不足を埋め合わせることを試みていたのである。

1939年9月はじめにかれがただちにバーゼルへの渡航を行なうことは実現し

なかった。というのはアメリカ国務省が彼に国際機関の所属員のための外交官パスポートを与えることを遅延したからである。当然のことながら彼の職務へのアメリカ合衆国政府のこうした（間接的であれ）資格認定なしにはマッキトリックは BIS における仕事を始めるつもりはなかった。パスポート発行の遅延の背後にある推進力は、アメリカ合衆国市民の BIS 総裁に何ら異議を持っていなかった合衆国国務長官のコーデル・ハルではなく、合衆国財務省長官で BIS 敵対者であるヘンリー・モーゲンソー、Jr. であった。「さまざまなヨーロッパ諸国が合衆国国務省に介入した後」、やっとマッキトリックは熱望していた外交官パスを受け取った³⁰⁾。彼の夫人と4人の娘はそれにたいして旅券を得ることができず、アメリカにとどまらねばならなかった。11月のはじめにマッキトリックは彼の真新しい合衆国外交官パスをもってジェノアに向けて出発し、バリとロンドンへの電撃訪問の後1939年12月の半ばにバーゼルに着いた。

マッキトリックがセントラルバーン・シュトラースの彼のオフィスに就くか就かないうちに、一通りの公式の就任挨拶回りがライヒスバンク、イタリア銀行、フランス銀行、イングランド銀行、およびベルギー国立銀行を巡って始められた。まずはじめに二日間にわたってベルリンに行き、そこで彼は1940年1月16日にライヒスバンク総裁ヴァルター・フンクに出迎えられた。ナチ党の機関紙「フェルキッシャー・ベオーバハター」はこの「アメリカ金融人」のドイツの首都への来訪を極めて好意的に報道している。二回の夜の祝宴でマッキトリックはドイツの銀行界で地位と名前のあるすべての人と知り合う機会ができた。昼の間ずっとライヒスバンク総裁ヴァルター・フンクと副総裁エミール・ブールは新しい BIS 総裁に対して公的な会談で BIS の存続に対するドイツのおおきな利益を断言していた。「監査役会における何らの変更も人員の減少も行なわれるべきでない。(中略) BIS の能力はこれまでの枠のまま維持されねばならない。BIS は仕事の可能性を十分持っている。」とヴァルター・フンク

30) Oral-History-Interview McKittrick, p. 9.

は語った³¹⁾。それとともにおそらく当時まさしく増大していたニューヨークにおけるライヒスバンクの資金往来での BIS の役割についても言及されたであろう(後述)。

マッキトリックは彼の側からはライヒスバンク総裁に対して「ロンドンとバリの同僚」との彼の会談について伝えた³²⁾。かれはまた BIS を完全に不偏不党で運営するつもりだ。第三帝国に対して何らの有利な扱いをするものでもない³³⁾と強調した。そのさい同席していた BIS 総支配人パウル・ヘヒラーは BIS 銀行部門のいくつかの当面していた、ライヒスバンクに合併されたダンチヒ中央銀行とワルシャワの閉鎖されたポーランド銀行の清算を巡る問題に注意を導いた。人々は、この二つの機関の持っていた BIS 株式持ち分と投票権がライヒスバンクに移ることに同意した。フンクとマッキトリックはライヒスバンクと BIS の間のコミュニケーションについてのこれからの行動についても調整を行なった。副総裁エミール・プールがヴァルター・フンクの代理者としてバーゼルとの間で人的なコンタクトを保ち、他方ライヒスバンク総裁は文書による手続きの枠内で今や敵対することになった諸国に所属する BIS 監査役会諸メンバーとの間で互いに情報交換すべきということになった。会談の最後にフンクとマッキトリックは BIS 主任エコノミストのベル・ヤコブソンのベルリン来訪についても取り決めた³³⁾。

1940年1月のマッキトリックのベルリン訪問はかれがヴァルター・フンクとの間で行なった唯一の人的な会合であった。ライヒスバンク副総裁のエミール・プールはそれとは異なり1940年1月から1945年4月にかけて無数の回数バーゼルとの往復を行なっている。ライヒスバンク幹部プールはヴィルヘルム帝国期に一職員としての仕事を始めている。大体においてのちの BIS 総支配

31) MC, Aktennotiz Paul Hechler zur Besprechung von Walter Funk mit McKittrick am 16. /17. Januar 1940.

32) Ebenda.

33) MC, Memorandum "Der deutsche Standpunkt ueber die zukunfte Arbeit der BIZ", 13. 2. 1940.

ク連邦準備銀行ハリソン総裁にたいするライヒスバンクの便宜を図った働きかけのほかに、かれは精力的にレオン・フレイザーとの間で手紙のやり取りを行なっている。フレイザーが副頭取のファースト・ナショナル・バンクは既述のようにアメリカにおける BIS の大株主であるだけではなく BIS 配当金のアメリカにおける支払場所でもあった。フレイザーは、民間銀行代表としてニューヨーク連邦準備銀行顧問会議にも座していたが、かれは BIS を第三帝国へ至る秘密の直接アクセス・ルートとしても使うことができたのである。「もうひとつのメッセージを同封する。これは君自身が封をしてヘヒラーに渡してくれ。」こういう後書きを以ってレオン・フレイザーは1940年4月18日のマッキトリックへの手紙を結んでいる³⁶⁾。レオン・フレイザーがどれぐらい多くのこうした秘密のメッセージをやり取りしていたか、また誰に向けてそれを行っていたか、は今日までのところ霧の中にある。現在までに文献の中で明らかになっているのは、1939年10月16日付けのヤルマール・シャハトの手紙であり、パウル・ヘヒラーとレオン・フレイザーを経てアメリカ合衆国大統領ルーズベルトに届いたものである。そのなかでシャハトはアメリカに、ドイツの経済界にとって受入可能な、第三帝国に対する講和提案を行なうことを要請している³⁷⁾。

対独宥和の「新段階」

こうした諸関連を理解する上で有用なのは、パリにおける国際商工会議所 (ICC) の活動である。1939年11月10日にパリの ICC は「経済平和のための委員会」を設立した。委員長は IBM 社長のトーマス・J. ワトソン Thomas J. Watson, sr. であり、二人の副委員長はオランダの産業家 F. H. フェンテナー F. H. Fentener van Vlissingen とアメリカの銀行家でロックフェラーの支配するニューヨークのチェース・バンク頭取のウインスロップ・W. オルド

36) MC, Letter from Leon Fraser to McKittrick, 18. 4. 1940.

37) Friedlaender, Saul, *Hitler et les Etats-Unis*, Paris 1966, p. 68, in Trepp. 拙稿「ナチ経済とアメリカ大企業——GM社の場合——」『経済論叢』第157巻第1号で検討したGM社副社長 J. D. ムーニーとヒトラーとの会談 (1940年3月) もこうした関連の中で見る事が出来よう。

リッチであった。さらに前ベルギー首相バウル・ヴァン・ジーランドや前オランダ首相H. コリジン H. Colijin というような著名なメンバーを持ったひとつの委員会も加わった。その際また当時アメリカのヨーロッパ政策に大きな影響を持っていたシンク・タンクであるカーネギー財団やロックフェラー財団またロックフェラー財団が資金を出している「ジュネーブ・リサーチ・センター」、今日のジュネーブ・国際ハウテス・エチューデス大学研究所の前身も加わっていた。同様に BIS もここに代表を送っていた。主任エコノミストのベル・ヤコブソンである。ドイツの側はキールの世界経済研究所のアンドレアス・ブレデル教授 Andreas Predoehl を派遣していた³⁸⁾。この委員会の設立はポーランド占領以降の時期における第三帝国への経済的な宥和政策の支持と深い関係がある。かれらは、チェコスロヴァキアとポーランドの併合の後ヒトラーが東部における空間に対するその渴望を止めたと期待したのである。「平常どおりの営業」、あるいは「第三帝国との経済平和」のもとで、世界貿易を振興させるべきだというのである。そのさいこの委員会においてはアメリカ合衆国の大企業の代表者たちがこれまでのイギリスの対独宥和政策家たちを大きく背後に押しやっていたのである。イギリス人にとってはこうしたドイツ人といっしょの催しは違法であった。というのはイギリスの新法「対敵取引法」を破ることになるからである。これに対してまだなお中立国である合衆国市民は枢軸諸国との交流に関して克服し難い問題というものは持っていなかったのである。第三帝国との貿易についての最大の利益関心をもっていたのは、自らを最もよくドイツの外国貿易の特性に順応させておりドイツとの間で利益の上がる業務を行っていたアメリカ企業であった。IBM もそのひとつであった。その社長トーマス・J. ワトソン sr. もまた1937年にヒトラーから「ドイツ鷲十字勲章」を受けている。これは IBM が第三帝国の再軍備をそのホラリート・パンチカード技術の輸出によって支えたがゆえにワトソンに授与されたのである。

38) Zentrales Staatsarchiv Potsdam, Bestand : Dt. Reichsbank, Nr. 6741, Bl. 205-208, Meeting of the committee of inquiry for economic peace of the ICC in Brussels, January, 26, 1940.

他のアメリカ諸企業はドイツ諸企業との間で国際カルテルを通じての利益の上がる取り決めによって世界市場をお互いの間で分け合っていた。この例はクルップ社と GE (ジェネラル・エレクトリック) 社との間の金属加工切削工具としてのタンダステンカーバイドの使用についての取り決めや、スタンダードオイル・ニュージャージー社と IG ファルベン社との間の水素添加法及び合成ゴム等をめぐるクロスライセンス、インターナショナル・ニッケル社 (INCO) と IG ファルベン社との間の協定などきわめて多数存在する³⁹⁾。すでにわれわれが見たとおりフォード社と GM 社の経済的な利害関心もかれらの大きなドイツ子会社を以って第三帝国のそれと重なっていた⁴⁰⁾。「経済平和のための委員会」の最初の作業会議は1940年の1月26日にブリュッセルで開かれ、具体的な行動計画の作成のための様々な作業グループが作られた。BIS 主任エコノミスト・ベル・ヤコブソンもこれに参加している。ヤコブソンの総裁マッキトリックへの報告の一コピーをかれはパウル・ヘヒラーにも渡しており、ヘヒラーはこれを即座にベルリンのライヒスバンクの国民経済部門に送り届けている⁴¹⁾。

39) Tonndorf, H. G., *Krieg der Fabriken*, Zürich, 1943, S. 121.

40) 拙稿「ナチ経済とアメリカ大企業——フォード社の場合——」『欧米資本主義の史的展開』(思文閣, 1996年)所収, 前掲拙稿「ナチ経済とアメリカ大企業——GM社の場合——」参照。

41) Zentrales Staatsarchiv Potsdam, Bestand: Dt. Reichsbank, Nr. 6741, Bl. 205-208, Meeting of the committee of inquiry for economic peace of the ICC in Brussels, January, 26, 1940.